がれきの山 必死の救援活動

サハリン地震 AMDA医療チーム

ロシア・サハリン州北部を襲った地震で、アジア医師連絡協議会（AMDA、本部・岡山市檜津）の救援医療チームは、最も被害の大きかった州北部のネフチェゴルスクや患者が運ばれたオハ、州都ユジノサハリンスクの病院などで救援活動を続けている。日本のNGO（非政府組織）として最初に救援に駆け付けたAMDAの活動をユジノサハリンスクで取材した。（社会部・藤原健史）

岡山空港からチャーター機で第一陣の救援医療チーム（三人）が出発したのは地震発生から二日後の五月二十九日正午（日本時間）。二日には第二陣（八人）が現地へ向かい、合わせて約一〇・五トンの物資をサハリンへ運び込んだ。

重症者多く死亡も

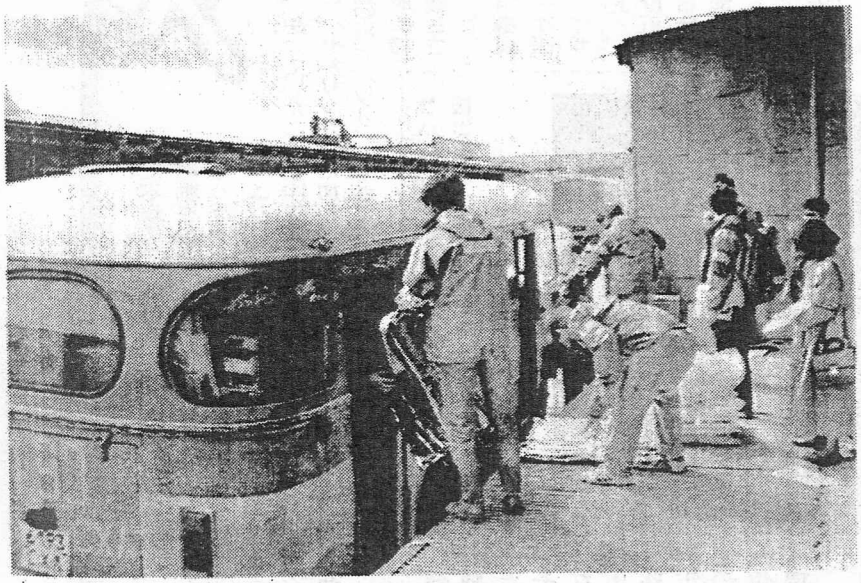
ネフチェゴルスク

石油採掘の街として知られたネフチェゴルスクは、中心部の約五百㍍四方の建物が完全に破壊され人口約三千人の町は、がれきの山と化した。救出者の中には骨折などの症状が重く、筋肉組織が破壊されて腎（じん）不全を起こし、人工透析が必要なクラッシュ・シンドローム（挫滅症候群）と呼ばれる患者が多い。

抗生物質などの医薬品を三日夜にネフチェゴルスクやオハに運び込んだ秋山一誠医師（三）＝大阪市浪速区＝は「予想を上回る被害。必死の救出活動が続けられており、街全体が死臭に覆われていた。夜の冷え込みが厳しく、被災者に毛布を

ロマノフ病院長（右）から患者の状況などについて説明を受けるAMDAの救援医療チーム＝サハリン州立中央病院

サハリン州立中央病院長「日本の好意に感謝」



ネフチェゴルスクとオハへの救援物資を空港までのバスに運び込むAMDAの救援医療チーム＝ユジノサハリンスク・保税倉庫

クラッシュ・シンドロームなどの重症患者が運び込まれたサハリン州立中央病院

手渡すとスパシーバ（ありがとう）と大変喜ばれた」と言う。

ロシア政府はとりあえず患者をオハに運び、重傷者はさらにユジノサハリンスクや本土のハバロフスクに軍用ヘリコプターなどで次々と搬送。ユジノサハリンスクのサハリン州立中央病院へは患者約三十人、隣接する小児病院には子供約十人が運ばれていた。クラッシュ・シンドロームが多く、救援医療チームは不足している透析液などの医薬品を手渡し、人工透析を実際にサポートした。

ビクトル・ロマノフ院長は「一生懸命治療に当たっているが、状態の悪い患者が多くなる人もいる。ギプスや包帯を含め医薬品や看護スタッフなどは不足しており、日本の好意に大変感謝している」と話していた。

しかし、発展途上国の医療救援で実績のあるAMDAも大国のロシアでは戸惑うことが多かった。NGOやボランティアの概念がなく、第一陣は州政府高官の理解を求めるのに入国して丸一日を費やした。また「ロシアのことはロシアで」というプライドや医師が現地で足りていることで、物資輸送や医療協力などの交渉が当初はスムーズに進まなかったという。

二陣の救援医療チームリーダー岩永資隆医師(三四)＝京都府宇治市＝は「今回は医薬品の緊急支援が中心的な活動だったが、医薬品や被災者の生活物資は不足しており支援は引き続き必要だ。阪神大震災での緊急救援の経験が少しでも生かせたのではないかと思う」と話していた。

支援活動に大成果

帰岡のAMDA三宅医師語る 生活物資は不足

サハリンから五日帰国したアジア医師連絡協議会の三宅和久医師(三三)＝岡山市万成西町＝が六日午後の飛行機で岡山空港に到着、AMDAメンバーの出迎えを受けた。

三宅医師は、被災地のネフチェゴルスクなどで行った医薬品需要の調査や被災者への毛布配布などの活動について「ロシア人医師が足りていて、直接治療活動ができない場合でも、必要な医薬品や生活物資の調達など状況に応じた支援活動ができ、大きな成果を挙げることができた。サハリン日本協会などの理解が得られてからは、役所への手続きなど協力してもらえ、エリツィン発言の影響はなかった」と振り返った。

また、「現地では遺体の確認に訪れた遺族が泊まる場所もない状態。毛布などの生活物資は足りておらず、負傷者の継続的な治療のためには医薬品の補充も必要」と訴えた。

このためAMDAでは「今後も必要な医薬品や救援物資を、なるべく早く現地に輸送したい」としている。

現地に滞在しているAMDAの救援医療チーム第二陣の医師ら八人は、来週初めまでに二班に分かれて帰国する予定。

診療チームの受け入れに壁

ロシア当局

【ユジノサハリンスク6日共同】ロシア・サハリン州北部を襲った地震では、阪神大震災と同様、海外の非政府組織（NGO）の緊急医療チームが相次いで現地入りしたが、医薬品を提供したり医療器の使い方を指導するなどの医療支援が主体で、直接診療を目指したチームはロシア当局から敬遠されている。

阪神大震災の場合には、日本の医師免許を持たない外国人医師の受け入れ態勢の法的な不備が問題となったが、ロシアでは医師の過剰とかつての超大国としてのプライドが受け入れの〝壁〟となっているようだ。

日本のNGOではアジア医師連絡協議会が一、二陣合わせて医師ら十一人を派遣、日本赤十字社も医師ら三人から成る救援調査団を送り込んだ。日本以外では「国境なき医師団」（本部・パリ）などの救援チームが現地入りしている。

しかし、被災地ネフチェゴルスクでは五階建ての十七棟のアパート群が地震で一瞬にして崩壊したため、がれきの下敷きになった人々の生存率が極めて低く、負傷して救出された人は六日朝現在、六百四十九人にとどまっている。

また、ロシアでは医師が過剰な上、経済混乱で低賃金に見切りをつけて離職した元医師らが救援のために駆け付けたこともあって、ロシア側は「治療に当たる医師は多すぎるぐらいだ」（サハリン州政府当局者）として、外国人医師の応援申し出を断っている。

ロシア側には「ロシアの医師は外国の医師より劣ってはいない」（ファルフディノフ同州知事）と感情的に反発している面もあるが、重傷者は高度な治療のため日本に搬送した方がいいのではないかとの声も現地医師の間には出てきているという。

死者1380人

オハなどで余震も

【モスクワ6日共同】ロシア非常事態省によると、サハリン州北部のオハ、モスカリボで六日未明、余震があり、住民が避難する騒ぎがあった。オハでは先月二十八日の大地震で住宅約三十棟、学校、幼稚園などの建物が被害を受けており、危険な状態にあるという。

地震で壊滅したネフチェゴルスクでは住民が倒壊した団地の下敷きになったため、オハなどでは、多くの住民が地震による住宅倒壊を恐れて屋外で暮らしていた。

一方、ネフチェゴルスクでは救出作業が続いており、現地時間六日午後六時までに収容された遺体は計千三百八十体になった。過去二十四時間にがれきの下からは百六十三人の遺体が発見されたが、生存者はいなかった。